● 読書感想文コンクール 小学校 1･2･3 学年 の部●

入選

久住　和暉（くすみ　かずき） 陶鎔小 ２年生

作品名:「火垂るのはか」を読んで
図　書:火垂るの墓

今年は、せんご七十年の年だとニュースでしり、い前に、このもの語をえい画で見たことがありましたが、あらためて、このもの語を読もうと思いました。

せいたとせつ子の兄妹が、アメリカのばくげきにいえをやかれ、お母さんをうしなってしまいます。読んでいても、はげしい空しゅうのよう子や、にげる人たちのさけび声が聞こえてきそうです。そして、心がきゅうっと、くるしくなります。

そんなはげしい火の中、せいたとせつ子はにげてたすかりました。兄妹は、やけた町をあるいて、親せきのいえにむかいます。

そのいえでしばらく生活しますが、おばさんにいじわるを言われたり、ごはんをちゃんとたべさせてもらえないことが、とてもかわいそうだと思いました。

そして二人は、自分たちだけの生活をはじめます。ものもたべものもなく、夜は明かりもありません。せいたとせつ子は、ホタルをつかまえて明かりにします。でも、そのホタルも、朝にはしんでしまいました。せつ子は、しんでしまったホタルのために「ホタルのはか」を作ります。いのちにはおわりがあるんだ、と言うことをかんじました。

せいたもせつ子も、まん足にたべられず、とうとう、せつ子はびょう気になってしまいました。

せいたが、たべものを何とかしようとして、やさいをぬすんでけいさつにつれて行かれてしまいます。

もし、せんそうがなかったら、せいたは、ぬすみをしなくてよかったと思いました。そして、せつ子も、おいしゃさんにちゃんとみてもらって、びょう気がなおったと思いました。

せつ子は、びょう気がなおらず、しんでしまいました。四さいというみじかい時間でした。

ぼくにも妹がいます。せつ子より一つ年上の五さいです。妹が目の前でしんでし

まうなんて、考えられません。
　せんそうがおこらなかったら、せいたもせつ子も、しななくてよかったと思いました。
　人がころしあう、こんなざんこくなことは、おこしてはいけないと思います。
　これからもぼくは、かぞくや友だちとなかよくして、よいよの中にして行きたいと思いました。